

## 『源氏物語』現代語訳の研究及び実践

文化創造専攻 国文学領域

一六〇〇一CJM 佐藤 由佳

### 修士論文要旨

本論文は、二部構成である。

第一部においては、六種の『源氏物語』の現代語訳を、「近代の現代語訳」「現代の現代語訳」「国文学研究者の現代語訳」に分類し、それぞれを調査、比較検討し、問題点を明確にした。その結果を踏まえて、求められる現代語訳はどのようなものであるか分析した。

六人の訳者の共通点は、「一般読者」を対象とし、より多くの人々に読んでもらいたいという目的をもって訳業に取り組んだ点であった。

与謝野晶子は、わかりやすい訳だが、意識である。

谷崎潤一郎は、「文学的翻訳」という言葉に集約されるとおり、忠実ではあるが、理解の一助となるはずの頭注も含め難解である。

円地文子は、小説のように読み進めやすいが、加筆が多い。

瀬戸内寂聴は、忠実さや平安朝の雰囲気を出すため、工夫が凝らさ

れているが、成功したとはいいがたい。また、最適な語句が使用されていない可能性がある。

林望は、自身の考察が現代語訳に織り込まれ、工夫がなされている。しかし、原文において略されている部分についても明確にしようとした点に疑問が残る。

中野幸一は、研究者らしい丁寧な訳であり、原文を対照にするなどの工夫がみられる。それでもやはり専門書であり、気軽に手に取れるという点には欠ける。

このように、それぞれ特徴をもって多くの読者を獲得しようとしているが、それぞれに問題点を残す。この問題の要因は、「一般読者」という幅広い読者層を対象にしているという点にあると考えた。

そこで、対象読者年齢層を区切って、その年齢層にふさわしい現代語訳を試みることにした。

第二部においては、義務教育で古典を学びはじめ、読書のおもしろさや古典に興味を持ち始めるであろう年齢、具体的には十一歳から十二歳の少年少女を読者対象として、自ら『源氏物語』「御法」巻を現代語訳した。試みにあたっては、まず、目的及び基準を明確に示した。その上で、一巻すべての現代語訳を試みたものである。その際は、音読することも念頭においた。